

人間関係研究センター40周年へよせて¹

日本基督教団隠退教師 中堀仁四郎

南山学園に人間関係の教育 導入するきっかけになった出来事があったころ、立教大学のキリスト教教育研究所(JICE)が日本で初めてラボラトリー(方式の体験学習)をやっていました。私はそのJICEの所員でした。¹

ラボラトリーはカナダとアメリカの聖公会でやっていたプログラムを日本に持ってきたものです。一番最初のラブ(研修)は英語でやったらしい。JICEの研修にカトリックの人も来られるようになって、カテキスタという特別な在俗修道会から吉川先生が来られた。

清里・清泉寮のハンターホールは、アメリカから研修を持って来られたハンターさんの名前で、ラボラトリー用に作ったものです。吉川先生が、トレーニングが終わりかけたときに、「こういうのを南山でもやりたい」というふうな話を、私にしたことがあるんです。その時は柳原先生がJICEの所長で、「そうですか、それでは、柳原先生に相談されたら」ということになったという経緯があります。吉川先生は、他の人にも相談しておられるとは思いますが、一番初めに私とそういう話をしたのだらうと思います。“あの4つ並んだ部屋と、スタッフルームがあって、その前に玄関がついている、このところで話した”という記憶。それが南山のラボラトリーの始まりだったらうと記憶しています。

センターの発足というのはあまり覚えていないですが、センターでトランザクショナル・アナリシス(TA:交流分析)というのをやりました。センターでは、エリック・バーンが考えたものを、ラボラトリーの視点の中で、自分の相互作用、関係性の中で生きているというインタラクション、そして実験室としてやるということを大事にしていました。理屈や方法になるだけが多いのですが、そのもとは個人個人の今、時。生まれてこようと思って生まれてきたというより、気がついたら、私というのがいた。命を与えていただいたということ。時はやっぱり限りのあることで、その時、その時というのが基本になっていくんでしょうね。

¹ この記事は、藤田嘉子(センター事務局)が中堀先生へ行ったインタビューをもとに、池田満(センター員)が再構成したものです。